

「反面教師となってくれた最愛の母」

高田 陽子

母は七十歳の誕生日を迎えてひと月後にこの世を去ってゆきました。自然豊かな鳥取の田舎で育った母は、海で魚やワカメを採ったり、山に行けば山菜やきのこ採りを楽しんだりと一年中四季を堪能していて、いつみても快活で病気とは無縁なほど元気でした。年を重ねると共に疲れやすさも出て、頭痛も時折あったりと不安が出てきたものの、病院で検査を受けるでもなく、人間ドックを進めてもパンフレットすら見ずに、返ってくる言葉は決まって「大丈夫！それに何か病気が見つかることも誰が家のことをするの？」と…。確かに父は上げ膳据え膳で、家のことは何もできないし、娘の私も子供がいて離れて暮らしていたので母の言い分も重々納得できるものでした。しかし、孫に恵まれてからは一層長生きしてもらいたいという私の願いも強くなり、何度か病院に連れていこうと試みたものの母の意志は頑なに変わることなく、日常が過ぎ去ってゆきました。

母が病院を嫌っていた理由はほかにありません。健康には自信があったことでもあります。母が実の父親を亡くしたのは、院内感染によるもので病院に対する不信感が人一倍強かったことも原因でした。先の長くないとわかった母は父親の看病は自宅ですと決意し、住み慣れた家で心穏やかに過ごさせようと毎日尽くしていたのを私も目の当たりにしてきました。命の灯が消えようとする時もずっと見守り続け、腕の中で抱きしめながら最期の深い一呼吸をついて旅立ってゆく父親を見送った母。「親孝行できたかな」と涙ながらに言っていました。寄り添って最善を尽くせたことで別れの悲しみは幾ばくか和らいでいたようにも思いました。だからこそ母は、病気になったとしても大好きな我が家で過ごしたい、最後まで家族の傍にいたいという気持ちで誰よりも強かつたような気がします。

しかし、不安が現実となったのは忘れもしない父の日のことでした。「お母さんが、救急車で運ばれる」と慌てた父の電話を受けたのですが、最初は半信半疑できっと大丈夫という根拠のない自信があった私。病院に駆けつけて説明を受ける一瞬にして目の前が暗くなるのがわかりました。「肺に何か影もあり脳の方も・・・」と正直どう説明されてか覚えていませんが、年を越せるか難しいという言葉だけは胸に突き刺さり、鮮明に覚えています。その日から私の日常も一変し、二人の孫を連れて病院通い。会っても母の表情はぱっとせず、うわごとを言っているおばあちゃんの姿に子どもたちも動揺していました。病名

は肺がん、脳に転移あり。

治療するなら抗がん剤と放射線治療という選択肢がなく、少しでも長く生きられるならとすがすがしかりませんでした。家でゆっくりと看取りをするべきだったのかと今でも悩むことがあります。一縷の望みでもかけたかたつたのです。次第に言葉も少なくなっていく、生き生きとしていた目もぼんやりとするようになりましたが、二人の孫は毎日のようにお見舞いに行き、ごはんを食べさせたりお絵描きをしてあげたり、時には添い寝をしたりと変わりゆくおばあちゃんの姿に変わらぬ寄り添い、無邪気にはしゃぐ我が子に正直救われたものです。母と会話がしたい、笑って欲しい…あの美味しい料理はどうやって作るの？今日はこんなことがあったよ・・・と、いつもどうでもいいことでもしよつちゅう話していたのに突然日常が奪われて信じられない日々が続きました。あの時病院に連れていっていらすとどれだけ悔やんで泣いたことか・・・病に倒れてから半年後に、母は息を引き取りました。死ぬということ初めて目の当たりにした八歳の娘はよほど悲しかったのでしよう、寝るときには涙を流し。眠れないほどでした。

「お母ちゃんは死なないよね。長い生きするよね」と。

私は毎年人間ドックを受けることを決意し、脳ドックも大腸がん検査もできる限りの項目を検査してもらい、毎日の食事や運動も心掛けるようになりました。我が子のためにも一日でも長く生きていようと思えたのは、命をかけて教えてくれた母のおかげでもあります。もしあの時病院に連れていって、人間ドックを受けていたら今も生きていたのではと思うと悔しくてなりません。命をかけて家族に尽くし続けた母への感謝ももちろん忘れません。

葬儀を終えて片付けていると母の日記が出てきて、こう書いてありました。「きつとどこか悪いんだろうな。でも病院に行くわけにはいかないこと。」

最期まで意志の強さを貫いた頑固な母には頭が下がりました。でも、たった一度の検査が一日でも長く生きられるきっかけになったのかもしれないんだと、天国の母に伝えたいです。